



学習性無力感なんて…

サッカーWカップでのザックジャパンはよく戦ったと思うのですが、ファンや評論家の中には試合前とは正反対の手厳しい意見もあります。結果はさておき、ここまで日本のサッカーが成長し世界の中で互角に戦えるようになったことを喜び、その上で足りない点が何かを探っていくべきではないでしょうか。

実は子どもに対する接し方においても、同じようなことを臨床心理学の立場から述べている人がいます。大人が子どもに断罪的態度をとったり表面的な説教しかしなかったりすれば、子どもは「どうせ話したってなんの意味もない」「いやむしろ、そんなふうにしたら、かえって自分は嫌な思いをさせられるだけ」など「学習性無力感」を身につけてしまうこともあるのだそうです。自分が無力であるという思いを学習してしまうなんて悲しいですね。かといって思春期になると自分づくりに踏み出そうとする頃なので、大人が子どもと「共有すること」、子どもに「応答すること」（いわゆる褒めて育てよう）にあまりに躍起になり過ぎると、大人の願いとは裏腹に、子どもは余計に心を閉ざしたり意固地になったりもしやすいとのこと。いやぁ難しいです。結局大人は「そこそこ応答的だろうか」とか「まあまあOKかな？」くらいのゆるさを含めた振り返りを忘れなければよいそうです。この塾がそこそこのゆるいのを弁解しているみたいですが、学校の先生よりも長い付き合いの塾生もたくさんいて、親や先生とのタテの関係ではない斜めの関係がちょうど良いのかとも思っています。

教えるという仕事をしていて思うのは、相手が理解不十分なところを察知して、相手の立場からみてわかりやすい言葉にいかに置き換えられるかが勝負だということです。少なくとも「こんなこともわからないのか」という態度は絶対にとってはならないと講師たちにも話しています。積極的な人もいれば控えめな人もいる、飲み込みは早いですがすぐ忘れる人もいればじっくり理解できれば定着する人もいる、そんな個性の違いも踏まえてこの夏も指導していきます！